

## 審査員長 講評

川上 元美（デザイナー）

今年で第8回目を迎える「雪のデザイン賞」は全国各地から163点そして海外から6点の169作品の応募があり、今回も、第一次審査を寄せられた画像から47点を選出し、実物作品にて第二次審査会が行われました。

ヴィクター・パパネックの著書「生きのびるためのデザイン」の冒頭に「デザインとは、意味ある秩序状態（オーダー）を作り出すために意識的に努力することである。われわれが、窓ガラスにできた霜の花、蜂の巣の完全な正六辺形、さまざまな葉、バラの花の構造などのなかに見いだす秩序状態と喜びは、パターンに対する人間の好みの反映である、云々」のくだりがありますが雪や氷の結晶も同様に自然界の摂理により千変万化の気象の条件のもとで、あるべき姿、理屈で生成された造形です。そしてなんとその無数の表情の豊かなことでしょう。このような自然の営みをモチーフにして、意味あるデザイン作業をすること、難しさや面白さを表現することは人の感性や良心の表れでもあります。今回もどのような作品と出会えるかと気持ちが高揚しました。

雪の科学館、展示室に並べられた作品を、審査員一同で見て回り、ディスカッションを重ねて作品の内容認識を行なった後、各自がポストイットを付けて廻りました。満票2点を含む高得点がおおくの作品に集まり最終的に金賞、ラネージュ賞、銀賞、銅賞、各1点と奨励賞5点、佳作12点が選ばれました。

生活のシーンや素材がテーマのコンペが多い中、あらためてこの「雪のデザイン賞」が雪や氷のテーマを縦糸にして、幅広く領域や素材や技術を規定しないデザインが横糸に織り込こまれた稀有なコンペであることを実感します。又、あらゆる造形ジャンルや映像が一同に集まって競う内容に評価をつけることは、一方で難しいことではあります

が、毎回審査員の見識を撚り合わせて良好な結果を得てきました。

今回も審査を終えて斬新なアイデア、新しい素材や技法のもの、仕事の確かなもの、工夫の施されたもの等と質の高い作品が増えており、出品者がどのような方なのか気になる、担当事務局に伺うと、専門職の方が多く、回を重ねるごとにその作品の質のレベルアップに驚かされます。

金賞の『霜柱』は工作や梱包等に使われるプラスチックのグルーの「糸引き」に着眼して、霜柱の連続する様をジオメトリックな美しい形にまとめた作品で、普通の素材を使いその特徴を上手に引き出した秀作で、「アルテ・ポーベラ」のような新しい価値の表現であると思います。

ラネージュ賞の『In the silence』は、延べし飴のようにガラスを糸状に伸ばして平たく重ね、氷結させた静けさのなかに、そのうねる形が一瞬にして閉じ込められたような気迫と危うさの宿る作品です。

銀賞の『雪景色の箱』は、朴の木で仕上げた霧氷の景色のデザイン、寒気の中にも暖かみを包含した造形は、日常よく見かける木の器と異なりじつに清々しく、新しい表現です。

銅賞の『舞う』は銅と錫の板に大小の無数の穴を穿ち、これを変形させて構成することで雪雲から舞い落ちる雪の様を表現した作品で、色の折り重なりがユニークな景色を創っています。

奨励賞の『Transparency No.4』が審査の時点で話題になりました。作者の見た氷河の氷層を棒上に採取した雪氷学会の映画からの隠喩で、近年多方面に使われはじめている、極薄ガラスを角柱の中に重ねて氷層のコアに見立てた作品で興味ある発想なのですが、極薄ガラスの脆さによる細かい欠片が、手に触れることが前提で無くても危険であるとの意見も有りました。

『Luce』のストローで作られたシャンデリアが魅力的です。雪や氷に光が反射し或い

は透過して輝く様を表現したアイデアが優れています。ただし製作の雑さが気になりました。これは色々な展開ができると思います。是非模索して頂きたい。

『Rikka』の銀細工の確かさが印象的でした。その他それぞれ魅力的な作品が多く見られました。

雪の文化の発信や、加賀市の豊かな工芸、デザイン産業の進展に寄与することを期待されている、この「雪のデザイン賞」も回を重ねてきましたが、この特徴あるコンペを、より一層盛んにするためにも応募作品数をもっと増やしたいとの思いがあります。

アモーレパシフィック社の協力に感謝すると同時に、主催者側の広報の方法を再考する必要性を感じております。